

【論文】

中国語の“对+N₁+的+N₂”¹⁾と
日本語の「N₁+に対する+N₂」²⁾について

馬 小兵

About Chinese's "dui+N₁+de+N₂" and Japanese's "N₁+nitaisuru+N₂"

Ma Xiaobing

要 旨：

本論文首先就“对+N₁+的+N₂”和「N₁に対するN₂」の用法进行了分类。然后列举了大量例句，在语义和语法方面考察了N₁能够作什么样的N₂的定语。最后分析总结了“对+N₁+的+N₂”和「N₁に対するN₂」的对应关系。针对“对+N₁+的+N₂”，本论文分析了N₁和N₂之间的关联；针对「N₁に対するN₂」，本论文将N₂分为名词、动名词和形容词的名词形三种类型，并总结了各种类型的特点。对于“对+N₁+的+N₂”和「N₁に対するN₂」的对应关系，本论文指出两者基本对应，但是在构成N₂的音节数目、是否表示“有关”之意、对于形容词的指向性、主语的位置等方面两者不对应。

キーワード：“对+N₁+的+N₂”、「N₁+に対する+N₂」、連体形、
意味上の関連、対応関係

1. “对”と「に対して」の連体形

中国語では、“对+体”³⁾により構成される“介词结构”（「介詞構造」(介詞(“对”) +N)は、“对字短语”（“对” +Nにより構成される“介词(‘对’)句”。以下“对字句”と言う)と称されている。“对字句”の重要な文法機能の一つは、連体修飾語（“对+N+的+N”）を構成することである。それについて、北京大学中文系(1982)では“由‘对于’(‘对’)构成的介词结构，

中国語の“对+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁+に対する+N₂」について

有时可以修饰名词。”(p168)「对于(“对”)で構成される介詞構造は名詞を修飾する時もある」と、呂叔湘編(1980)では“‘对于…’(‘对…’)可以加‘的’修饰名词或动名词。”(p158)「“对于…”(“对…”)は“的”を加えて名詞または動名詞を修飾することができる」と、侯学超編(1998)では、“对(对于)+名/动{的+中心语}。介词短语作定语。必须加‘的’。”

(p173)「“对”(“对于")+名詞または動詞(動名詞)+“的”+被限定語」。介詞(“对”)句は連体修飾語になる場合、被限定語との間に必ず“的”(の)を入れなければならない」と説明されている。

一方、日本語では、「Nに対するN」という形で「～に対して」の連体形を構成する。それについて、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998)では、「「それに向けての」「それに関しての」という意を表し、次に続く名詞を修飾する。「その問いに対しての解答」のように、「Nに対してのN」という形が用いられることもある。」(p443)と説明されている。

ちなみに、中国語の介詞“对”の意味については、劉月華他(1983)では、“引进行为动作的对象或关系者。”(p163)「行為、動作の対象または関係を持つものを導入する」と、日本語の複合格助詞「に対して」の意味については、『日本語教育事典』(1982)では、「動作が向けられる対象や目標を表す」(p395)と、それぞれ説明されている。

以上のように、中国語の“对+N+的+N”と、日本語の「Nに対するN」とは、構文上において似ており、意味上においてもかなり対応していると考えられている。本論文では、便宜上“对+N+的+N”について、“对”に後接する「N」をN₁と、“的”に後接する「N」をN₂と称する。「Nに対するN」について、「にに対する」に前接する「N」をN₁と、「にに対する」に後接する「N」をN₂と称する。

しかし、N₁とN₂との関係において、中国語の“对+N₁+的+N₂”と、日本語の「N₁に対するN₂」との、両連体形については、

- a N₁はどのようなN₂を修飾可能なのか

- b N_1 と N_2 は意味上どのような関連にあるのか
- c 中国語の“対+ N_1 +的+ N_2 ”と、日本語の「 N_1 に対する N_2 」との、両連体形がどのように対応しているのか

との 3 点を論じる必要がある。

本論文は、この 3 点を中心に、“対+ N_1 +的+ N_2 ”と、「 N_1 に対する N_2 」について用例調査を行った上で、次のような順序で上記の諸問題に回答し、中国語の“対+ N_1 +的+ N_2 ”と、日本語の「 N_1 に対する N_2 」との対応関係をまとめたいと思う。

- 1) “対+ N_1 +的+ N_2 ”と、「 N_1 に対する N_2 」に関する、これまでの研究を概観し、その問題点を確認する。
- 2) N_1 はどのような N_2 を修飾可能かを観察する。
- 3) N_1 と N_2 は意味上どのように関連しているのかを論じる。
- 4) 中国語の“対+ N_1 +的+ N_2 ”と、日本語の「 N_1 に対する N_2 」との対応関係をまとめる。

また本論文で論じる中国語の“対+ N_1 +的+ N_2 ”における“的”に後接する N_2 と、日本語の「 N_1 に対する N_2 」における「に対する」が前接する N_2 には、名詞のみならず、動詞から派生した動名詞、形容詞⁴⁾から派生した形容詞の名詞形も含まれている。

2. “対+ N_1 +的+ N_2 ”についての先行研究と問題点

2.1 “対+ N_1 +的+ N_2 ”の用法分類

中国語の“対+ N_1 +的+ N_2 ”のタイプについて、“的”に後接する N (N_2) の性質(品詞)により用法分類されている。それに関する、徐浩良・陳炯(1985)、劉順(1998)などの先行研究をまとめると、以下ようになる。

中国語の“对+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

A. “对+N₁的+V”⁵⁾

- (1) a “对美国的评价”「アメリカに対する評価」
b “对敌人的炮击”「敵に対する砲撃」
c “对现实的批判”「現実に対する批判」
d “对场面的刻画”「場面に対する描写」

B. “对+N₁的+N₂”⁶⁾

- (2) a “对客人的态度”「客に対する態度」
b “对群众的意见”「大衆に対する意見」
c “对文物的兴趣”「文物に対する興味」
d “对家庭的观点”「家庭に対する見方」

C. “对+N₁的+A”⁷⁾

- (3) a “对前途的绝望”「前途に対する絶望」
b “对范佩莉的任性”「范佩莉のわがままに対し」
c “对统治者的残酷”「統治者の残酷さに対し」⁸⁾
d “对生活的敏感”「生活に対する敏感さ」

上記ABCの三タイプそれぞれの特徴について、劉順（1998）は、以下のように論じている。

タイプAの“对+N₁的+V”について、劉順（1998）は、“根据V是及物动词（V_j）还是不及物动词（V_b），又可分为两个次类，即：对+N₁的+V_j；对+N₁的+V_b。”「動詞が他動詞か自動詞かにより、さらに二つのタイプに分けられる。即ち、“对+N₁的+V_j”タイプと、“对+N₁的+V_b”タイプである」と説明している。

“对+N+的+V_j”について、(4)と(5)のような用例を挙げ、

- (4) a “对他的采访”「彼に対するインタビュー」
- b “对沈先生的误解”「沈先生に対する誤解」
- c “对小王的影响”「王さんに対する影響」
- d “对他的同情”「彼に対する同情」

- (5) a “对小说的评价”「小説に対する評価」
- b “对人生的思索”「人生に対する思索」
- c “对现实的批判”「現実に対する批判」
- d “对场面的刻画”「場面に対する描写」

(4)において、(6)が示すように、(6)aの“对/N+的+V_j”（“对/沈先生的误解”「沈先生の誤解に対して」）と、(6)bの“对+N+的/V_j”（“对沈先生的/误解”「沈先生に対する誤解」）のような、二様の意味がとれる甲タイプと、また(5)において、(7)⁹⁾が示すように、((7)aの“对+N+的/V_j”“对现实的/批判”「現実に対する批判」と、(7)bの“*对/N+的+V_j”“*对/现实的批判”「*現実の批判に対して」）そのような二様の意味にはとれない乙タイプがあると説明している。

- (6) a “对沈先生的误解，王利表现得很大度。”
 「沈先生の誤解に対して、王利は寛大な態度を取っている。」
- b “当时，社会上对沈先生的误解很深。”
 「当時、世の中では沈先生に対する誤解がいろいろあった。」

- (7) a “通过对现实的批判，使他更理解社会了。”
 「現実に対する批判を通じて、社会をより深く理解するようになった。」

中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁+に対する+N₂」について

b* “対／现实的批判”

* 「現実の批判に対して」

甲タイプと乙タイプの違いについて、劉順（1998）は、甲タイプの“対+N+的+V”におけるN（N₁）は、人間の意味を表すことばであるのに対し、乙タイプの“対+N+的+V”におけるN（N₁）は、事物の意味を表すことばであると説明している。

また、“対+N₁+的+V_b”について、劉順（1998）は（8）のような用例を挙げ、

(8) a “对他的成长”

○ 「彼の成長に対して」

* 「彼に対する成長」

b “对孩子的进步”

○ 「子供の進歩に対して」

* 「子供に対する進歩」

c “对思想的变化”

○ 「思想の変化に対して」

* 「思想に対する変化」

d “对作家的写作”

○ 「作家の創作に対して」

* 「作家に対する創作」

さらに“通过观察，这一类型没有歧义。由于V_b是不及物动词，N与V_b只能构成一种语义关系，即施动关系，其层次切分为‘对／N+的+V_b’。”(p21) 「観察を通じて、このタイプには二様の意味がない。V_bが自動詞なので、NとV_bは一種の意味関係しか構成できない。即ち「動作主+動詞」関係である。それを“対／N+的(の)+V_b”と分析できる」と説明している。

しかし、(8) の和訳が示すように、劉順 (1998) が分析した“对/N+的 (の) +V_b”は、“对字句”ではあるものの、「“对字句”の連体形」ではない。

タイプ B の“对+N₁+的+N₂”について、劉順 (1998) は、(9)、(10)、(11) のような用例を挙げ、

- (9) a “对文物的兴趣”「文物に対する興味」
b “对历史的看法”「歴史に対する見方」
c “对前途的信心”「前途に対する自信」
d “对家庭的观点”「家庭に対する見方」

- (10) a “对我的精神世界”「私の精神世界に対して」
b “对人们的心理”「人々の心理に対して」
c “对产品的质量”「製品の品質に対して」
d “对老钱的书”「銭さんの本に対して」

- (11) a “对学生的态度”
「学生に対する態度」
「学生の態度に対して」
b “对父母的情爱”
「父母に対する情愛」
「父母の情愛に対して」
c “对学生的兴趣”
「学生に対する興味」
「学生の趣味に対して」
d “对他的想法”
「彼に対する考え方」

中国語の“对+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

「彼の考え方に対して」

(9)では、“对+N₁的/N₂”と、(10)では、“对/N₁的+N₂”と、分析しており、二様の意味はとれない。それに対し、(11)では、各用例が示すように、“对+N₁的/N₂”と、“对/N₁的+N₂”との二様の意味がとれると説明している。これは、中国語固有の形態から発生した問題で、即ち日本語の「学生に対する態度」と「学生の態度に対して」は、意味はもちろんのこと、形態も違っている。それに対し、中国語の“对学生的态度”は、二様の意味がとれるものの、形態が一つしかない。

タイプCの“对+N的+A”について、劉順(1998)は“这类情形出现的频率不高，N与A只能构成一种语义关系，即描述关系，结构关系为对/N+的+A。例如，‘对范佩莉的任性’。‘范佩莉’与‘任性’之间即为描述关系。”「このタイプの出現率は、高くない。NとAは一種の意味関係しか構成できない。即ち描写関係である。構造関係は“对/N₁的+N₂”である。例えば、「范佩莉のわがままに対して」では、「范佩莉」と「わがまま」との関連は描写関係である」(p21)と説明している。

以上、中国語の“对+N的+N”の用法分類、とそれに関する劉順(1998)の説を紹介した。劉順(1998)は、“对+N的+N”の用法分類に関する各タイプの特徴をまとめたものの、以下のような問題点がある。

1. “对+N的”が「V・N・A」(動名詞・名詞・形容詞派生の名詞)を修飾出来ると説明したものの、具体的にどのようなものを修飾可能かについては、説明していない。

2. “对+N的+V_b”は、(8)が示すように、単なる“对字句”であって、“对字句”の連体形ではない。

- (8) a “对他的成长”
○「彼の成長に対して」
*「彼に対する成長」
- b “对孩子的进步”
○「子供の進歩に対して」
*「子供に対する進歩」
- c “对思想的变化”
○「思想の変化に対して」
*「思想に対する変化」
- d “对作家的写作”
○「作家の創作に対して」
*「作家に対する創作」

3. タイプCの“对+N+的+A”について、「NとAは一種の意味関係しか構成できない。即ち描写関係である。構造関係は“对/N+的+A”である」と論じたものの、(3)が示すように、(3)b、(3)cは、“对/N+的+A”の“对字句”であるが、(3)a、(3)dにおけるNとAの構造関係は“对+N+的/A”((3)aでは“对前途的绝望”「前途に対する絶望」、(3)dでは“对生活性的敏感”「生活に対する敏感さ」)で、“对字句”の連体形“对+N+的/A”である。従って、(3)a、(3)dの“对+N+的+A”においては、「N」は「A」が要求する対象である。意味上描写関係でもなく、構文上“对/N+的+A”でもない。

- (3) a “对前途的/绝望”「前途に対する絶望」
b “对/范佩莉的任性”「范佩莉のわがままに対し」
c “对/统治者的残酷”「統治者の残酷さに対し」
d “对生活性的/敏感”「生活に対する敏感さ」

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

2・2 “対+N₁的”の修飾可能な「N₂」(N・V・A)の種類

この問題について、本稿筆者が調べた限りでは、これまで余り論じられなかったようであるが、李小栄(2000)は比較的詳細にこの問題を取り上げている。以下2・2・1では“対+N₁的”の修飾可能な「名詞」(「N₂」)を、2・2・2では“対+N₁的”の修飾可能な「動名詞」(「N₂」)を、という順にそれをまとめる。

2・2・1 “対+N₁的”の修飾可能な「名詞」(「N₂」)

“対+N₁的”の修飾可能な名詞について、李小栄(2000)は、以下三つの条件を満たさなければならないと指摘した。

1. 2音節名詞

(12) a と b が示すように、被修飾名詞が1音節語(“仇”「恨み”“情”「情け」)である場合、“対+N₁的+N₂”(N₂=名詞)は成立しない。(12) c と d が示すように、被修飾名詞が2音節語(“仇恨”「憎しみ”“情意”「愛情」)に代えるなら、“対+N₁的+N₂”(N₂=名詞)は成立する。

(12) a * “对黑社会的仇”「悪社会に対する恨み」

b * “对家乡的情”「故郷に対する情け」

c ○ “对黑社会的仇恨”「悪社会に対する憎しみ」

d ○ “对家乡的情意”「故郷に対する愛情」

2. 抽象名詞

(13) a と b が示すように、被修飾名詞が2音節語(“文章”「文章”“图片”「図画」)であっても、抽象的な意味を表さない限り、“対+N₁的+N₂”(N₂=名詞)は成立しない。(13) c と d が示すように、被修飾名詞が抽象的な意味を表す2音節語(“偏见”「偏見”“看法”「見方」)に代えるなら、“対+N₁的+N₂”(N₂=名詞)は成立する。

- (13) a * “对语法理论的文章” 「? 文法理論に対する文章」
b * “对自然风光的图片” 「? 自然風景に対する図画」
c ○ “对妇女的偏见” 「女性に対する偏見」
d ○ “对经济形势的看法” 「經濟情勢に対する見方」

3. 二価名詞¹⁰⁾

李小荣 (2000) は“对+N₁+的”の修飾可能な名詞 (N₂) の種類について、2 音節名詞、抽象名詞の条件 (“话题”「話題」、「理论」「理論」、「原則」「原則」、「学说」「学説」) を満たしたものの、二価名詞でない限り、(14) が示すように、“对+N₁+的+N₂” (N₂=名詞) は成立しないと、説明している。

- (14) a * “对家庭的话题” 「? 家庭に対する話題」
b * “对经济的理论” 「? 經濟に対する理論」
c * “对外交工作的原则” 「? 外交業務に対する原則」
d * “对探索宇宙奥秘的学说” 「? 宇宙の秘密の探索に対する学説」

二価名詞について、李小荣 (2000) は、“所谓二价名词就是，一些名词要求有另外两个名词性成分与之相联系，例如‘意见’常常要求‘持意见者’和‘意见针对的对象’，例如‘分房子的事他有意见’，例中的‘他’和‘分房子的事’就是与‘意见’相联系的另外两个名词性成分。像‘意见’这样的名词就是二价名词，它所要求与之联系的两个名词性成分就是它的配项。”

(p292) 「所謂二価名詞とは、同名詞と関連のある、他の二つの名詞の性質を持つ成分を要求する、一部の名詞を指す。たとえば「意見」は「意見がある者」と「意見のむかう対象」を常に要求し、用例の「家屋の分配に対して彼は意見がある」における「彼」と「家屋の分配」が「意見」が要求する他の二つの名詞の性質を持つ成分である。「意見」のような名詞は二価

中国語の“对+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

名詞で、同名詞が要求する、それと関連のある、二つの名詞の性質を持つ成分が同名詞の結合項である」(p292)と説明している。

- (15) a “对足球的兴趣”「サッカーに対する興味」
b “对这个问题的见解”「この問題に対する見解」
c “对健康的好处”「健康に対するメリット」
d “对农村工作的方针”「農村業務に対する方針」

また、“对+N₁的”の修飾可能な二価名詞(N₂)の意味について、李小荣(2000)は、以下のように分類している。

A. 感情・態度を表す

(16) a でいえば、その二つの結合項は、「感情・態度をもつもの」(“人们”「人々」)と「感情・態度が対するもの」(“祖国”「祖国」)である。

- (16) a “(人们)对祖国的感情”「(人々の)祖国に対する感情」
b “对色彩的感觉”「色彩に対する感覚」
c “对工作的热情”「仕事に対する情熱」
d “对胜利的信心”「勝利に対する自信」

B. 見解・論点を表す

(17) a でいえば、その二つの結合項は、「見解・論点をもつもの」(“他”「彼」)と「見解・論点が対するもの」(“这个问题”「この問題」)である。

- (17) a “(他)对这个问题的见解”「(彼の)この問題に対する見解」
b “对妇女的偏见”「女性に対する偏見」
c “对故乡的印象”「故郷に対するイメージ」
d “对军训生活的感想”「軍事訓練の生活に対する感想」

C. 役割・効果を表す

(18) a でいえば、その二つの結合項は、「役割・効果を果たすもの」（“这种药”「この薬」）と「役割・効果を受けるもの」（“感冒”「かぜ」）である。

(18) a “(这种药) 对感冒的治疗效果”

「(この薬の) かぜに対する治療効果」

b “对人类健康的益处”

「人類の健康に対するメリット」

c “对农业的益处”

「農業に対する利益」

d “对身体的害处”

「体に対する不利な点」

D. 方針・政策を表す

(19) a でいえば、その二つの結合項は、「方針・政策を制定するもの」（“国家”「国」）と「方針・政策を受けるもの」（“农村工作”「農村作業」）である。

(19) a “(国家) 对农村工作的方针”「(国の) 農村業務に対する方針」

b “对外国投资者的优惠政策”「外国投資者に対する優遇政策」

さらに、李小荣 (2000) は、“总之，‘对于(对)……的’ 所能修饰的名词必须是双音节的、抽象的二价名词。这些名词都有两个配项，我们把它们概括为：[施事]、[对象]。‘对于(对)’ 引出[对象]这一配项，‘对于(对)……的……’ 反映的是二价名词及其一个配项的依存关系。” (p295) 「まとめて言うと、“对于(对)……的” の修飾可能な名詞は、2音節(以上)で、抽象的な意味を表す二価名詞でなければならない。これらの名詞は、全て二つ

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

の結合項がある。我々はそれらをそれぞれ「主体」、「対象」（「相手」）とまとめている。“对于（対）”は「対象」（「相手」）という結合項を引き出し、“对于（対）……的……”は二価名詞及びその一つの結合項との依存関係を示している」と、説明している。

2・2・2 “対+N₁的”の修飾可能な動名詞（「N₂」）

“対+N₁的”の修飾可能な動名詞（「N₂」）について、李小荣（2000）は、以下三つの条件を満たさなければならないと指摘した。

1. 2音節動詞

(20)a と b が示すように、動名詞が 1 音節語（“用”「使い」“讲”「言い」）である場合、“対+N₁的+「動名詞」（N₂）”は成立しない。(20)c と d が示すように、被修飾名詞が 2 音節語（“运用”「使用」“讲解”「説明」）に代えるなら、“対+N₁的+「動名詞」（N₂）”は成立する。

- (20) a* “对新知识的用”「新しい知識に対する使い」
- b* “对语法的讲”「文法に対する言い」
- c○ “对新知识的运用”「新しい知識に対する使用」
- d○ “对语法的讲解”「文法に対する説明」

2. 抽象行為を表す動詞

(21)a と b が示すように、動名詞が 2 音節語（“修理”「修理する」“打扫”「掃除する」）であっても、抽象的な意味を表さない限り、“対+N₁的+「動名詞」（N₂）”は成立しない。(21)c と d が示すように、動名詞が抽象的な意味を表す 2 音節語（“同情”「同情する」“思考”「思考する」）に代えるなら、“対+N₁的+「動名詞」（N₂）”は成立する。

- (21) a* “对汽车的修理”「自動車に対する修理」

- b* “对房间的打扫”「部屋に対する掃除」
- c○ “对弱者的同情”「弱者に対する同情」
- d○ “对现代人价值观的思考”「現代人の価値観に対する思考」

3. 二価動詞及び三価動詞

李小荣 (2000) は、“能受‘对于(对)……的’修饰的动词还必须是二价或三价动词,不能是一价动词。所谓一价、二价、三价是指动词所能连接的名词性成分的数目,只能连接一个名词性成分的动词叫作一价动词,例如‘觉悟’(他觉悟了);能连接两个名词性成分的叫作二价动词,例如‘保护’(我们保护野生动物);能连接三个名词性成分的动词叫作三价动词,例如‘赠送’(学校赠送每位教师一套百科全书)。”(p296)「また、“对于(对)……的”の修飾可能な動詞(N₂)は、二価動詞または三価動詞でなければならない、一価動詞にはならない((22)が示すように)。いわゆる一価、二価、三価とは、動詞の要求可能な名詞的な性質を持つ成分の数を指す。一つの名詞的な性質を持つ成分しか要求できないものを一価動詞と称し、例えば「覚醒する」(「彼は覚醒した」);二つの名詞的な性質を持つ成分を要求するものを二価動詞と称し、例えば「保護する」(「我々は野生動物を保護する」);三つの名詞的な性質を持つ成分を要求するものを三価動詞と称し、例えば「送呈する」(「学校は一人の教師ごとに百科全書をワンセット送呈した」)と、説明している。

- (22) a “谈判破裂了。”——*“对谈判的／破裂”
「交渉は決裂した」——*「交渉に対する決裂」
- b “精神崩溃了。”——*“对精神的／崩溃”
「精神は崩壊した」——*「精神に対する崩壊」
- c “家族衰败了。”——*“对家族的／衰败”
「一族は衰微した」——*「一族に対する衰微」
- d “敌人失败了。”——*“对敌人的／失败”

中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁+に対する+N₂」について

「敵は失敗した」 ——*「敵に対する失敗」

また、“対+N₁+的”は全ての二価動詞または三価動詞を修飾できるのではなく、“対+N₁+的”の修飾可能な二価動詞(N₂)について、李小栄(2000)は、意味上以下のように分類している。

A. 感情・心理活動を表す

(23)a でいえば、その二つの結合項は、「感情・心理活動を実施するもの」(“他”「彼」)と「感情・心理活動が関連する対象」(“祖国”「祖国」)である。

- (23) a “(他)对祖国的热爱”「(彼の)祖国に対する熱愛」
b “对新生活的向往”「新しい生活に対する憧憬」
c “对下属的怀疑”「部下に対する懷疑」
d “对长者的尊敬”「年輩の方に対する尊敬」

B. 認知活動を表す

(24)a でいえば、その二つの結合項は、「認知活動を実施するもの」(“读者”「読者」)と「認知活動の対象」(“出版者”「作者」)である。

- (24) a “(读者)对出版者的阅读”「(読者の)作者に対する閲読」
b “对蚁群的观察”「蟻の群れに対する觀察」
c “对人物性格的刻画”「人物の性格に対する描写」
d “对经济形势的予想”「經濟情勢に対する予想」

C. 言語活動を表す

(25)a でいえば、その二つの結合項は、「言語活動を実施するもの」(“他”「彼」)と「言語活動の対象」(“这件事”「この事」)である。

- (25) a “(他) 对这件事的评价”「(彼の) この事に対する評価」
b “对英雄的赞美”「ヒーローに対する賛美」
c “对新时代的讴歌”「新しい時代に対する謳歌」
d “对旧社会的控诉”「旧社会に対する告発」

D. 処置を表す

(26) a でいえば、その二つの結合項は、「処置行為を実施するもの」（“教師”「教師」）と「処置の対象」（“学生”「学生」）である。

- (26) a “(教师) 对学生的教育”「(教師の) 学生に対する教育」
b “对下岗工人的再培训”「レイオフされた労働者に対する再トレーニング」
c “对企业内部的整顿”「企業内部に対する整備」
d “对农民起义的镇压”「農民蜂起に対する鎮圧」

E. 需要を表す

(27) a でいえば、その二つの結合項は、「需要を要求するもの」（“国家”「国」）と「需要を受けるもの」（“人材”「人材」）である。

- (27) a “(国家) 对人材的需求”「(国の) 人材に対する求め」
b “对幸福生活的追求”「幸せな生活に対する追求」
c “对下属部门的要求”「管轄下の部門に対する要求」
d “对幸福生活的渴望”「幸せな生活に対する渴望」

F. 影響を表す

(28) a でいえば、その二つの結合項は、「影響を与えるもの」（“疾病”「病気」）と「影響を受けるもの」（“健康”「健康」）である。

中国語の“对+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

- (28) a “(疾病) 对健康的影响” 「(病気の) 健康に対する影響」
b “对皮肤的刺激” 「皮膚に対する刺激」
c “对人权的侵害” 「人權に対する侵害」
d “对国家利益的损害” 「国の利益に対する損害」

最後に、李小荣 (2000) は、“实际二价动词的配项可以概括为 [施事] 和 [受事]。‘对于 (对) ……的……’ 对这些二价动词的情况简言之就是: ‘对于 (对)’ 引出其配项 [受事] 组成介宾词组作动词的定语。” (p301) 「實際、二価動詞の結合項について、「主体」、「受動者」とまとめられる。“对于 (对) ……的” とこれらの二価動詞との関連について、簡単にまとめると、“对于 (对)” はその結合項の「受動者」を引き出し、介賓構造を作り、動詞 (動名詞) の連体修飾語となる」と、説明している。

また、三価動詞について、李小荣 (2000) は、“三价动词连接三个名词性成分, 例如 ‘厂里奖励劳模一台录音机’, 我们把句中的 ‘厂里’、‘劳模’、‘一台录音机’ 这三个配项分别叫作 [施事]、[与事]、[受事], ‘对于 (对)’ 引出配项 [与事], 作动词的定语。” (p301) 「三価動詞は、名詞の性質を持つ成分を三つ要求する。例えば、「工場は模範労働者に一台の録音機を褒賞として与えた」における「工場」「模範労働者」「一台の録音機」を、われわれは、それぞれ「施事」(「主体」)、「与事」(「相手」)、「受事」(「受動者」(対象)) と称する。“对于 (对)” は“与事” (「相手」) を引き出し、動詞 (動名詞) の連体修飾語となる」と説明しているものの、挙げた用例は、(29) (N₁= “与事” (「相手」)) と (30) (N₁= “受事” (「受動者」)) のみで、それについて、意味分類していない。

- (29) a “对劳模的奖励”
「模範労働者に対する褒賞」
“厂里奖励劳模一台录音机”

「工場は模範労働者に一台の録音機を褒賞として与える」
（「主体」→“厂里”（「工場」）、「相手」→“劳模”（「模範労働者」）、「受動者」→“一台录音机”（「一台の録音機」））

b “对我们的答复”

「我々に対する回答」
“人们答复我们这个问题”
「人々はこの問題についてわれわれに回答する」
（「主体」→“人们”（「人々」）、「相手」→“我们”（「我々」）、
「受動者」→“这个问题”（「この問題」））

c “对中国的援助”

「中国に対する援助」
“日本援助中国救援物资”
「日本は中国に救援物資を援助した」
（「主体」→“日本”（「日本」）、「相手」→“中国”（「中国」）、
「受動者」→“救援物资”（「救援物資」））

d “对贫困地区的支援”

「貧しい地域に対する支援」
“国家支援贫困地区粮食”
「国は貧しい地域に食料を提供する」
（「主体」→“国家”（「国」）、「相手」→“贫困地区”（「貧しい地域」）、
「受動者」→“粮食”（「食料」））

(30) “对这个问题的回答”

「この問題に対する回答」
“该公司向记者回答了这个问题。”
「記者にむかって、同社はこの問題に回答した。」
（「主体」→“该公司”（「同社」）、「相手」→“记者”（「記者」）、
「受動者」→“这个问题”（「この問題」））¹¹⁾

中国語の“对+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁+に対する+N₂」について

以上、中国語の“对+N₁+的”がどのようなタイプの名詞(N₂)、または動名詞(N₂)を修飾可能かに関する、李小荣(2000)の説をまとめた。同説は、名詞と動詞の結合価という立場から、多くの用例を挙げ、

A. “对+N₁+的”が、2音節を備え、抽象的な意味を表す二価名詞、二価動詞または三価動詞(N₂)しか修飾できないことを述べた。

B. さらに“对+N₁+的”の修飾可能な二価名詞、二価動詞(N₂)について、意味分類した。

以上の二点は高く評価できるものの、李小荣(2000)には、以下のような問題点がある。

a. 連用形の“对N…”から、連体形“对N的N”への転換について

(31) が示すように、中国語では、連用形の“对N…”から、連体形“对N的N”へ転換する場合がある。李小荣(2000)は、この点について説明していない。

(31) a “他对这个问题提出了新的看法。”

「彼は、この問題に対して、新しい見方を示している。」

b “他提出了对这个问题的新的看法。”

「彼は、この問題に対しての、新しい見方を示している。」

b. “对+N₁+的+N₂”における「N₂」が形容詞派生の名詞である場合について

(32) が示すように、“对+N₁+的+N₂”における「N₂」((32)では“不满意”「不満」)は、中国語では、形容詞である。李小荣(2000)は、このタイプについて説明していない。

(32) “她的委屈是一些对生活的不满意，无泪可落，而是想骂谁一顿，出出闷气。”(骆驼祥子(原)・p365)

「ひのえ午嬢の悩みは生活の仕方に対する不満から出たもので、まったく些細なことでは涙の種となっている。むしろ相手なんか誰でもいいから、猛然と罵倒して、この結ばれた気分を晴らしさえすれば気が済むのだ。」(骆驼祥子(訳)・p261)

c. “对+N₁的+N₂”における「N₂」が動名詞である場合、その動名詞を派生する動詞が要求する「主体」と“对+N₁的+N₂”との位置関係について

中国語の場合、“对+N₁的+N₂”における「N₂」が動名詞なら、その動名詞を派生する動詞が要求する「主体」をSとすると、(33)a が示すように、“S+对+N₁的+N₂” (“毛泽东对蒋介石态度的估计”「毛沢東の蒋介石に対する評価)になるのが普通のものである。(33)b の“对+N₁的+S 的+N₂” (“?对蒋介石态度的毛泽东的估计”「蒋介石に対する毛沢東の評価)になると、若干不自然になる。しかし、(33)c のように“对+N₁的+S₁ 的+N₂+对+N₁的+S₂ 的+N₂” 比較の表現をすると、さほど不自然でなくなる (“对蒋介石态度的毛泽东(=S₁) 的估计和对蒋介石态度的周恩来(=S₂) 的估计”「蒋介石に対する毛沢東の評価と蒋介石に対する周恩来の評価)」。この点についても、李小荣(2000)は説明していない。

(33) a “然而，形势的发展表明毛泽东对蒋介石态度的估计还是乐观一些。”(毛泽东传(原)・p582)

「しかしながら、情勢の進展は毛沢東の蒋介石に対する評価がいささか楽観しすぎていることを示していた。」

(毛沢東伝(訳)・p582)

b ? “然而，形势的发展表明对蒋介石态度的毛泽东的估计还是乐

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

観一些。”

「しかしながら、情勢の進展は蒋介石に対する毛沢東の評価がいささか楽観しすぎていたことを示していた。」

- c “对蒋介石态度的毛泽东的估计和对蒋介石态度的周恩来的估计”
「蒋介石に対する毛沢東の評価と蒋介石に対する周恩来の評価」

2・3 状語（連用修飾語）から定語（連体修飾語）への転換

中国語に関する、状語（連用修飾語）から定語（連体修飾語）への転換については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまり論じられていないようである。

張虹（1993）は、

“文中的定语限于宾语的修饰、限制性成分，状语限于带标志词‘地’（有人写作‘的’）的状语。”「文中における連体修飾語は、目的語を修飾・制限するものに限定し、連用修飾語は標示詞「地」（「的」と表記する人もいる）を伴うものに限定する」という前提条件の下で、

朱德熙（1982）“有的时候，做状语的形容词在意义上只跟后头动词的宾语相关，跟动词在意义上反而没有直接联系，例如：

圆圆的排成一个圈

辣辣的做一碗汤”（p175）¹²⁾「そして、場合によっては、連用修飾語になる形容詞が意味上は後の動詞の目的語とのみ関わりをもち、動詞とは意味上直接の関係をもたない、ということもある。たとえば次のような例である。

まーるく並んで輪をつくる

からーくスープを作る」

を引用して、以下の2点を指摘した。

- A. “辣辣的做一碗汤”（からーくスープを作る）を“做一碗辣辣的汤”（からーいスープを作る）に転換でき、且つ文の意味は少しも変わらない。
- B. “圆圆的排成一个圈”（まーるく並んで輪をつくる）を“排成一个圆圈的圈”（並んで、まーるい輪をつくる）に転換できるが、文の意味は若干変わる。即ち、連用修飾語“圆圆的”「まーるく」は、転換する前、述語動詞“排成”（「並んで、つくる」）を修飾・限定すると同時に、意味上目的語“圈”（「輪」）にも関連しているが、転換した後、目的語“圈”（「輪」）のみ修飾・限定することになる。

しかし、張虹（1993）では、中国語介詞の連用形（例えば“对N…”）から、その連体形（例えば“对N的N”）への転換については、説明されていない。

中国語の介詞“对”の連用形の“对N…”から、連体形“对N的N”への転換について、3・3節で、日本語の「に対して」から「に対する」への転換と比較しながら、観察する。

3. 「N₁に対するN₂」について

3・1 「N₁に対するN₂」についての用法分類

「N₁に対するN₂」の用法分類については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまりなされていないようである。例えば、『日本語教育事典』（1982）では「連体格の用法として、「に対しての」と「に対する」とがある」（p395）と、森田・松木（1989）では「なお、「に〈へ〉に対して」の連体格の用法としては、「に〈へ〉対しての」と「に〈へ〉対する」とがある」（p11）と、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では（「Nに対するN」について）「それに向けての」「それに関しての」という意を表し、次に続く名詞を修飾する。「その問いに対しての解答」のように、「Nに対してのN」という形が用いられることもある」（p443）と、それ

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

ぞれ触れるにとどまっている。本稿筆者は、用例調査を行った上で、「N₁に対するN₂」の「に対する」に後接する「N₂」の品詞の種類に基づき、「N₁に対するN₂」を三つのタイプに分類した。

A. 「N₁に対するN₂」における「N₂」=N（名詞）

(34) の各用例のような、各用例において、「N₁に対するN₂」の「に対する」に後接する「N₂」（「熱情」「態度」「責任」「義務」）が名詞であるタイプ。

- (34) a 「美奈子の心の中には、青年に対する熱情が、刻一刻潮のやうに満ちわたつて来るのだつた。」（菊池・真珠夫人）
b 「俺は貴女の俺に対する態度を見て、つくゞ悟つたのです。」（菊池・真珠夫人）
c 「青木君に対する僕の責任の一部として、申し上げるのです。」（菊池・真珠夫人）
d 「それが君の赤ん坊に対する義務だよ。」（芹沢・巴里に死す）

B. 「N₁に対するN₂」における「N₂」=V（動名詞）¹³⁾

(35) の各用例のような、各用例において、「N₁に対するN₂」の「に対する」に後接する「N₂」（「熱愛する」⇒「熱愛」、「賞賛する」⇒「賞賛」、「復讐する」⇒「復讐」、「反発する」⇒「反発」、「憧憬する」⇒「憧憬」）が動詞から派生した動名詞であるタイプ。

- (35) a 「但し、己の天分の薄いことや或いは自分が時代に合わないことをただただ感じて、自ら挫けながら然も芸術に対する熱愛は益々怪しく深くなって行くのである。」（佐藤・都会の憂鬱）

- b 「モーニングを着た小山男爵は、自分の見識に対する夫人の賞讃を期待して居るやうに、自信に充ちて云つた。」
(菊地・真珠夫人)
- c 「瑠璃子に対する莊田の求婚が、本当は自分の息子に対する復讐であったことを知ってから、彼はその復讐の手先になって居た、自分のあさましさが、しみぐと感ぜられた。」
(菊地・真珠夫人)
- d 「君の中に親父に対する反撥と憧憬があるのは当然だと僕は思うよ。」(円地・食卓のない家)

C. 「N₁に対するN₂」における「N₂」=A (形容詞派生の名詞)¹⁴⁾

(36) の各用例のような、各用例において、「N₁に対するN₂」の「に
対する」に後接する「N₂」(「寛容だ」⇒「寛容」、「忍耐強い」⇒「堪忍ぶ
よさ」、「無力だ」⇒「無力」、「不安だ」⇒「不安」、「不快だ」⇒「不快」)
が形容詞(形容動詞を含む)の名詞形であるタイプ。

- (36) a 「ひろ子に対する重吉の寛容、堪忍ぶよさは、ひろ子なしでは
やってゆけない重吉だからそうなのではなかった。」
(宮本・播州平野)
- b 「医師は死に対する人間の無力を現はすやうに、悄然と最後の
宣告を下した。」(菊池・真珠夫人)
- c 「身に迫った危険を、思ひがけなく脱し得た安心と、新しく突
発した危険に対する不安とで、心が一種不思議な動乱の中に
在った。」(菊池・真珠夫人)
- d 「彼は妻に対する大きな不快のなかにまた新しいデテイルを加
えたことを感じた。」(佐藤・都会の憂鬱)

3・2 「N₁に対するN₂」の用法分類について

3・1で述べたように、日本語の「N₁に対するN₂」については、先行研究を調べた限りでは、従来あまりなされていないようである。本稿筆者は、「N₁に対するN₂」の「に対する」に後接する「N」（N₂）の品詞の種類に基づき、「N₁に対するN₂」を、A. 「N₁に対するN（N₂=名詞）」、B. 「N₁に対するV（N₂=動名詞）」、C. 「N₁に対するA（N₂=形容詞派生の名詞）」、三つのタイプに分類した。以下、3・2・1ではAタイプ、3・2・2ではBタイプ、3・2・3ではCタイプを、という順に説明していく。

3・2・1 「N₁に対するN（N₂=名詞）」

本稿筆者が用例調査を行った結果、「N₁に対する」が以下の名詞（N₂）を修飾できることが分かった。

「愛情・圧力・意地・色恋・演技・怨恨・感情・関心・犠牲・規定・疑念・興味・義理・疑惑・愚痴・敬意・警戒心・敬虔・刑罰・嫌悪感・幻覚・懸賞金・好意・挫折感・自信・謝意・羞恥心・処置・情愛・情熱・親愛・神経・信念・信頼・責任・責任感・積極性・戦闘・善意・善後策・贈位・態度・諾否・耽美・知識・朝命・貞操・敵意・伝統・討論会・罵詈・反感・微笑・表現欲・表情・評判・不信・復仇心・分際・憤怒・憤懣・報酬・慕情・魅力・面子・優越感・欲求・憐憫・礼・劣等感」

「いい訳・風当り・気持ち・心づくし・心持・心やり・ことばづかい・仕打ち・憎しみ・ものごし」

これらの名詞及びその用例を分析すると、以下の現象を観察することができる。

- A. 殆どの語が、抽象的な意味を表すし、「げんこつ」のような具体的な物事を表す名詞は、このタイプの「N₂」にはならない。

(37) a ? 「太郎に対するげんこつ」

b ? 「花子に対する机」

B. 「N₁に対するN (N₂=名詞)」の内容を文の形で表すと、N₂が後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に置かれ、N₁が「ニ」格または「に 対して」の位置に置かれる。(38) が示すように、「N₁」は「ニ」格 または「に 対して」の位置に、N₂は後続動詞が要求する「ヲ」格 の位置に復元できる。

(38) a 「仕事に対する愛情」

「彼は仕事 (N₁) に (〇に 対して) 愛情 (N₂) をもつ。」

b 「そういうことに対する関心」

「私はそういうこと (N₁) に (〇に 対して) は一向に関心 (N₂) を持たない。」

c 「相手に対する敵意」

「彼は相手 (N₁) に (〇に 対して) 敵意 (N₂) をいだく。」

d 「手伝ってもらった人々に対する報酬」

「大家は手伝ってもらった人々 (N₁) に (〇に 対して) 報酬 (N₂) を与える。」

3・2・2 「N₁に対するV (N₂=動名詞)」

本稿筆者が用例調査を行った結果、「N₁に対する」の修飾可能な動名詞 (N₂) は、動詞として「ヲ」格を要求するものと、「ニ」格を要求するものとの二つのタイプがあることが分かった。

一. 「ヲ」格を要求するタイプ

「愛する・哀訴する・哀悼する・愛撫する・悪評する・威嚇する・意識する・遠慮する・記憶する・危惧する・規制する・希望する・糺問する・敬

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

愛する・軽蔑する・敬慕する・牽制する・顕示する・譴責する・後悔する・告訴する・顧慮する・贊嘆する・贊美する・支持する・肅清する・嫉妬する・思慕する・準備する・処遇する・賞賛する・承諾する・信任する・心配する・侵略する・信賴する・是認する・詮索する・憎悪する・尊敬する・弾圧する・治療する・中傷する・嘲笑する・懲罰する・決心する・決定する・同情する・認識する・熱愛する・配慮する・罵倒する・迫害する・批判する・非難する・評価する・表示する・復習する・侮辱する・妨害する・冒渌する・魅惑する・夢想する・黙殺する・憂慮する・理解する・冷笑する」

「扱う・慈しむ・恨む・恐れる・怯える・考える・捧げる・嫉む・償う・憎む・ねぎらう・装う・遣る」

これらの動詞及びその用例を分析すると、以下の現象を観察することができる。

- A. 殆どの語が、抽象的な意味を表し、具体的な動作を表す動詞の名詞形は、このタイプの「N₂」にはならない。

(39) a ? 「彼に対する殺し」

a ? 「コーヒーに対する飲み」

- B. 「N₁に対する」の修飾可能な動名詞 (N₂) として使用される場合、「考え・労い」のような、動詞の連用名詞形もあるし、「認識 (<認識する)」のようなサ変動詞語幹の形をとる漢語もある。

- C. (40) が示すように、「N₁に対するV (N₂=動名詞)」が動詞文の述語動詞として使用される際は、要求する「ヲ」格が「N₁に対するV (N₂=動名詞)」の「N₁」として、動名詞自身が「N₁に対するV (N₂=動名詞)」の「V」として示される。(40) a でいえば、「N₁に対するV (N₂=動名詞)」における「V」(「支持(する)」)が動詞と

して使用される際、要求する「ヲ」格（「あなた（を支持する）」が「N₁ に対する V（N₂=動名詞）」の「N₁」として、動名詞自身が「N₁ に対する V（N₂=動名詞）」の「V」として（「あなたに対する支持」）、「N₁ に対する V（N₂=動名詞）」が示される。

- (40) a 「あそこには、決して、あなたに対する絶対の支持というものは存在しなかったのよ。」（宮本・風知草）
「あなたを支持する——あなたに対する支持」
- b 「芸術に志した人々のうちに、どれだけ沢山の人がこのようにして、芸術に対する夢想と自信とをその青春と一緒に消滅し尽したか知れない。」（佐藤・都会の憂鬱）
「芸術を夢想する——芸術に対する夢想」

二. 「ニ」格を要求するタイプ

「挨拶する・受答えるする・回答する・感激する・感謝する・逆襲する・求婚する・共感する・幻滅する・拘泥する・告諭する・答える・サービスする・示威する・失望する・執着する・憧憬する・尋問する・誓願する・忠告する・挑戦する・発言する・反逆する・反撃する・反抗する・返事する・反応する・表示する」

「怒る・傾く・親しむ・悩む・酔う」

これらの動名詞及びその用例を分析すると、以下の現象を観察することができる。

- A. 大多数の語（「共感する・幻滅する・拘泥する」を除く）が、相手「ニ」格を要求する。
- B. 「N₁ に対する」の修飾可能な動名詞（N₂）として使用される場合、「悩み・酔い」のような、動詞の連用名詞形もあるし、「回答（<回答する）」のようなサ変動詞の語幹もある。

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

- C. (41) が示すように、「N₁に対するV (N₂=動名詞)」が動詞文の述語動詞として使用される際は、要求する「ニ」格が「N₁に対するV (N₂=動名詞)」の「N₁」として、動名詞自身が「N₁に対するV (N₂=動名詞)」の「V」として示される。(41) a でいえば、「N₁に対するV (N₂=動名詞)」における「V」(「求婚(する)」)が動詞として使用される際、要求する「ニ」格(「瑠璃子」)が「N₁に対するV (N₂=動名詞)」の「N₁」として、動名詞自身が「N₁に対するV (N₂=動名詞)」の「V」として(「瑠璃子に対する求婚」)、「N₁に対するV (N₂=動名詞)」が示される。

- (41) a 「瑠璃子に対する求婚が、本当は自分の息子に対する復讐であったことを知ってから、彼はその復讐の手先になって居た、自分のあさましさが、しみぐゝと感ぜられた。」(= (35) c)
「瑠璃子に求婚する——瑠璃子に対する求婚」
- b 「初めて、顔を見たばかりの少女の、厚い情に対する感激の涙だった。」(菊地・真珠夫人)
「厚い情に感激する——厚い情に対する感激」
- c 「つまり、質問に対する回答を、ちゃんとももって考えてあったような、応じ方だったのである。」(梶山・女の警察)
「質問に回答する——質問に対する回答」

3・2・3 「N₁に対するA (N₂=形容詞派生の名詞)」

本稿筆者が用例調査を行った結果、「N₁に対する」の修飾可能な形容詞派生の名詞(N₂)は、以下の形容詞から派生していることが分かった。

「あどけない・ありがたい・いじらしい・悲しい・堪忍強い・寛容だ・執拗だ・親切だ・懐かしい・皮肉だ・敏感だ・不安だ・不快だ・不敬だ・不満だ・不愉快だ・むごたらしい・無力だ」

これらの形容詞及びその用例を分析すると、以下二つのタイプがあることが分かった。

- A. 「敏感だ、無力だ、親切だ」などのような、「ニ」格または「に対して」を取るタイプ。

このタイプの形容詞は、(42) が示すように、「主体」((42) a では「政治家」、(42) b では「民兵」、(42) c では「彼」と「ニ」格または「に対して」((42) a では「世論」、(42) b では「敵の攻撃」、(42) c では「だれ」)を取り、その「ニ」格または「に対して」は、同タイプの形容詞が要求する「対象」を示すことができる。本論文では、それを指向性と呼ぶ。「 N_1 に対する A (N_2 =形容詞)」は、「ニ」格または「に対して」に先行する名詞+に対する A」という形で実現されている。

- B. 「悲しい・ありがたい・いじらしい・むごたらしい」などのような、「…とを感じる」タイプ。

上記の形容詞は、「ニ」格または「に対して」を取らず、「 N_1 に対する A (N_2 =形容詞派生の名詞)」の内容を文の形で表すと、「 N_1 が A ト感じる」「 N_1 ヲ A ク扱う」等の関係になる。上記の A (N_2) が対象を指向する必要がある場合は、「に対する」を通じてその「対象」((43) a では「渚山」、(43) b では「心づくし」、(43) c では「動物」、(43) d では「重吉」)を、当該形容詞の名詞形と結び付けて示す。「 N_1 に対する A (N_2 =形容詞)」は、「対象に対する形容詞派生の名詞」という形で実現されている。

- (4 2) a 「政治家は世論に (○に対して) 敏感である。」

「世論に対する敏感さ」

- b 「民兵は敵の攻撃に (○に対して) 無力である。」

中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁+に対する+N₂」について

「敵の攻撃に対する無力さ」

c 「彼はだれに（○に対しても）でも親切だ。」

「だれに対する親切さ」

(43) a 「彼の渚山に対する悲しさは一瞬間得も言われないものであった。」(佐藤・都会の憂鬱)

b 「美奈子は、母の言葉を聴くと、地の中へでも消えてしまひたいやうな恥かしさと、母の自分に対する真剣な心づくしに対する有難さとで、心の中が一杯になつてしまつた。」

(菊地・真珠夫人)

c 「主人に慕ひ纏はつて来る動物に対するやうないぢらしさを、此の無智な勝彦に対して、懐かすには居られなかつた。」

(佐藤・都会の憂鬱)

d 「入院させないと云つた時よりも、重吉に対するこの二度目のむごたらしさを、ひろ子は性根にしみて受けとつた。」

(宮本・風知草)

3.3 連用から連体へ

日本語の連体修飾語から連用修飾語への転換、いわゆる連体成分の移動に関する従来の研究は、優れたものが多く、その代表として、鈴木(1979)、矢澤(1987)、矢澤(1993)、奥津(1983)、奥津(1995.11~1997.9)などが挙げられる。本論文で論じた連体形の「Nに対するN」を分析すると、実際に連用形「Nに対して……」から転換した現象¹⁵⁾も観察することが出来る。

(44) a 「犯人は、国鉄に対して恨みを持っている。」

(夜行列車殺人事件・p43)

a' 「犯人は、国鉄に対する恨みを持っている。」

- a" 「犯人は、国鉄を恨んでいる。」
- b 「もし中国がわれわれに対して空襲をすれば、事態は收拾がつかなくなってしまう。」(黒雪・p90)
- b' 「もし中国がわれわれに対する空襲をすれば、事態は收拾がつかなくなってしまう。」
- b" 「われわれを空襲する。」
- c 「私は、かすかな期待を国鉄に対して抱いている。」
(夜行列車殺人事件・p206)
- c' 「私は、国鉄に対するかすかな期待を抱いている。」
- c" 「私は、国鉄に期待している。」

- (45) a 「彼は三人の娘に対して愛情をもつことが出来なかった。」
(犬神家の一族・p16)
- a' 「彼は三人の娘に対する愛情をもつことが出来なかった。」
- b 「彼は東北新幹線に対して意見を述べた。」
(夜行列車殺人事件・p177)
- b' 「彼は東北新幹線に対する意見を述べた。」
- c 「国鉄に対して非難の投書を繰り返している。」
(夜行列車殺人事件・p180)
- c' 「国鉄に対する非難の投書を繰り返している。」

(44) について、機能動詞文¹⁶⁾の立場から説明すると、「恨みを持つ」は「恨む」と、「空襲をする」は「空襲する」と、「期待を抱く」は「期待する」と同義的である。動名詞の立場から説明すると、(44) a"、(44) b"と(44) c"が示すように「に対して」に先行する名詞((44) a は「国鉄」、(44) b は「われわれ」、(44) c は「国鉄」)は意味上述語動詞の目的語(動名詞、(44) a は「恨み」、(44) b は「空襲」、(44) c は「期待」)の対象である。

(45) については、機能動詞文以外の用例である。(45)が示すように、機

中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

能動詞文以外 ((45) a の「愛情をもつ」、(45) b の「意見を述べる」、(45) c の「投書を繰り返す」が「機能動詞句」ではない) の場合でも、「～に対して」から「～に対する」へ転換可能である。

一方、中国語にも、連用形“対N…” から、連体形“対N的N”へ、または連体形“対N的N”から、連用形“対N…” への転換現象を観察することが出来る。

(46) a “电视屏幕上，伍修权将军对美国当局长达两个小时的声讨还在继续，……” (黒雪 (原)・p218)

(“对美国当局的声讨”「アメリカ当局に対する批判」= “対N的N”)

「テレビの画面では、伍修権將軍のアメリカ当局に対する二時間にわたる批判が、まだ延々に続いていたが、」(黒雪 (訳)・p341)

a’ “伍修权将军对美国当局进行声讨。”

「伍修権將軍はアメリカ当局に対して非難をする」 (= “対N…”)

b “大家对自己的关怀照顾情况”

「みんなの自分に対する心遣い」 (= “対N的N”)

b’ “大家对自己进行照顾。”

「みんなが自分に対して心配する。」 (= “対N…”)

4. “対+N₁+的+N₂” と「N₁に対するN₂」との対応

以上、論じてきたように、中国語の“対+N₁+的+N₂”と、日本語の「N₁に対するN₂」とは、基本的に対応しているものの、以下いくつかの面に対応していない。

A. 二様の意味

- (11) a “对学生的态度”
「学生に対する態度」
「学生の態度に対して」
- b “对父母的情爱”
「父母に対する情愛」
「父母の情愛に対して」
- c “对学生的兴趣”
「学生に対する興味」
「学生の趣味に対して」
- d “对他的想法”
「彼に対する考え方」
「彼の考え方に対して」

(11) が示すように、中国語の“对学生的态度”を、“对学生的／态度”（「学生に対する態度」）と、“对／学生的态度”（「学生の態度に対して」）という二様の意味に取れるものの、これは、中国語の語順から発生した問題で、日本語にはない。

B. 「N₂」になる音節数

- (47) a * “对家乡的情” 「故郷に対する情け」
b “对家乡的情意” 「故郷に対する情け」
c * “对新知识的用”
「新しい知識に対する使い」
d “对新知识的运用”
「新しい知識に対する使用」

中国語の「対+N₁的+N₂」と日本語の「N₁に対する+N₂」について

(47) が示すように、中国語の場合、「対+N₁的+N₂」における“的”に後接する「N₂」は2音節語でなければならない。これは、中国語固有のもので、日本語では(48)が示すように、特にその制限を受けない。

(48) 「電車に乗ってから、暫らくの間信一郎は夫人に対する酔から、醒めなかつた。」(菊地・真珠夫人)

○ “对夫人的醉意”

* “对夫人的醉”

C. 「に関しての」意味を表すか否か

(49) a 「加藤は、その通俗的な、山に対しての、理論が、彼のいままでの経験の中にきわめて稀薄な存在でしかなかったことを恥じた。」(新潮・孤高の人)

* “对山的／理论”

○ “关于山的／理论”

b 「そもそも相模自身のこんどの仕事に対する知識というものが甚だ怪しいものではあったが、」(射程・p89)

* “对工作的／知识”

○ “关于工作的／知识”

c 「役人になるならね、今でも学歴に対する常識が通用するだろうがね。」(射程・p36)

* “对学歴的／常识”

○ “关于学歴的／常识”

(49) が示すように、(49) の各用例を中国語に翻訳する際、“对”とは翻訳できず、“关于”と翻訳できる。それは、日本語の「N₁に対するN₂」が

「(N₁) それに関しての (N₂)」という意も表す¹⁷⁾ のに対して、中国語の“対+N₁+的+N₂”は、そういう意を表さないからである。

D. 形容詞への指向性

- (50) a 「彼の渚山に対する悲しさは一瞬間得も言われないものであった。」 (= (43) a)
* “对渚山的／悲伤”
○ “对／渚山的悲伤”
- b 「入院させないと云った時よりも、重吉に対するこの二度目のむごたらしさを、ひろ子は性根にしみて受けとった。」 (= (43) d)
* “对重吉的／悲惨 (情况)”
○ “对／重吉的悲惨 (情况)”
- c “对生活性的敏感” (沸き立つ群山・p347)
「生活に対する敏感さ」 (沸騰的群山・p276)

(50) が示すように、日本語の「悲しい、むごたらしい」のような形容詞は、「ニ」格または「に対して」を取らないが、対象を指向する必要がある場合は、「に対する」を通じてその「対象」を、当該形容詞の名詞形と結び付けて示すことができる。(50) a でいえば、「渚山に対する悲しさ」に、(50) b でいえば、「重吉に対するむごたらしき」になる。一方、(50) a と (50) b の中訳のような、中国語の“対+N₁+的+N₂”は、形容詞(“悲伤”「悲しい」「悲惨」「むごたらしい」)に、その「対象」(“渚山”、“重吉”)を指向させることができない場合と、(50) c の“敏感”(「敏感だ」)のような、形容詞(“敏感”「敏感だ」)にその「対象」“生活”「生活」を指向させる場合とがある。

E. 主体の位置

中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁+に対する+N₂」について

- (51) a 「彼に対する僕の要求は、全か無かです。」
b 「僕は、彼に対して、賠償を要求する。」
c 「僕の彼に対する要求は、全か無かです。」

(51) が示すように、(51) a から (51) b を想定することが出来る。従って、「要求する」という動詞が要求する「主体」（「僕」）を S とすると、日本語の場合は、「S の N₁ に対する N₂」((51) c) と、「N₁ に対する S の N₂」((51) a) との、2 種類の表現が出来る。それに対し、中国語の方は、(52) が示すように、通常“S 対+N₁+的+N₂” (52 b) になる。“対+N₁+的 S の N₂” (52 c) になると、不自然になるが、(53) が示すように比較の意味を表すと、さほど不自然でなくなる。

- (52) a “我对他要求赔偿”。
「僕は、彼に対して、賠償を要求する。」
b “我对他的要求”。
「僕の彼に対する要求」
c ? “对他的我的要求”。
「彼に対する僕の要求」

- (53) “对他的我的要求和对他的你的要求”
「彼に対する僕の要求と、彼に対する君の要求」

5. まとめ

本論文は、主として、以下の三つの問題について論じた。

- 一. “対+N₁+的+N₂” について
先行研究では、

- A. “对+N+的+N”
- B. “对+N+的+V” (“对+N+的+V_j” と “对+N+的+V_b”)
- C. “对+N+的+A”

三つのタイプに分けられている。それに対して、本稿筆者は次の 3 点を指摘した。

まず、“对+N+的+V”の用法分類である“对+N+的+V_b”は、単なる“对字句”であり、“对字句”の連体形ではない。よって、中国語の“对+N+的+V”の「V」には「V_b」が含まれないことを明らかにした。

第二に、“对+N+的+A”について、「NとA」の構造関係は、“对/N+的+A”ではなく、“对+N+的/A”である。“对/N+的+A”になると、単なる“对字句”になり、“对字句”の連体形でなくなる。よって、「NとA」の意味関係は、描写関係ではない。

第三に、“对+N₁+的+N₂”における「N₂」が動名詞である場合、その動名詞を派生する動詞が要求する「主体」と“对+N₁+的+N₂”との位置関係は、通常“S对+N₁+的+N₂”になるが、比較の表現になると、“对+N₁+的+S的+N₂”は、さほど不自然でなくなる。

二。「N₁に対するN₂」についてまず「N₁に対するN₂」の「に対する」に後接する「N₂」の品詞の種類に基づき、「N₁に対するN₂」を

- A. 「N₁に対するN (N₂=名詞)」
- B. 「N₁に対するV (N₂=動名詞)」
- C. 「N₁に対するA (N₂=形容詞派生名詞)」

三つのタイプに分類した。

次に、「N₁に対するN (N₂=名詞)」について、殆どの語が、抽象的な意

中国語の“対+N₁的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

味を表すし、「げんこつ」のような具体的な物事を表す名詞は、このタイプの「N₂」にはならない。また、「N₁に対するN (N₂=名詞)」の内容を文の形で表すと、N₂が後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に置かれ、N₁が「ニ」格または「に対して」の位置に置かれる。「N₁」は「ニ」格または「に対して」の位置に、N₂は後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に還元できると指摘した。

第三に、「N₁に対するV (N₂=動名詞)」について、「N」になる動名詞に、動詞として「ヲ」格を要求するタイプと、「ニ」格を要求するタイプとの2種類があると指摘した。

「ヲ」格を要求するタイプについて、殆どの語が、抽象的な意味を表すし、具体的な動作を表す動詞の名詞形は、このタイプの「N₂」にはならない。さらにN₁とVとの関連について、「ヲ」格を要求する動詞の場合は、「N₁をV」に還元することができると指摘した。

「ニ」格を要求するタイプについて、大多数の語が、相手「ニ」格を要求する。また、「ニ」格を要求する動詞の場合は、「N₁にV」に還元することができると指摘した。

第四に、「N₁に対するA (N₂=形容詞)」について、「敏感だ、無力だ、親切だ」などのような、「ニ」格または「に対して」を取るタイプと、「悲しい・ありがたい・いじらしい・むごたらしい」などのような、「…と感ずる」「…に／＼扱う」タイプとの2種類があると指摘した。前者は、同タイプの形容詞が要求する「対象」を示すことができる。「N₁に対するA (N₂=形容詞)」は、「ニ」格または「に対して」に先行する名詞+に対するA」という形で実現されている。後者は、形容詞のままでは「ニ」格または「に対して」を取らず、派生名詞形になった際に対象を表明する必要がある場合は、「にに対する」を通じて当該形容詞の名詞形と結び付けて示す。「N₁に対するA (N₂=形容詞)」は、「対象に対する形容詞派生の名詞」という

形で実現されていると指摘した。

三. “对+N₁+的+N₂”と「N₁に対するN₂」との対応関係について

中国語の“对+N₁+的+N₂”と、日本語の「N₁に対するN₂」とは、基本的に対応しているものの、以下いくつかの面に対応していない。

A. 二様の意味

中国語の“对+N₁+的+V_j”を“对/N₁+的+V_j”と“对+N₁+的/V_j”という二様の意味に取れるものの、これは、中国語の語順から発生した問題で、日本語にはない。

B. 「N₂」になる音節数

中国語の場合、“对+N₁+的+N₂”における“的”に後接する「N₂」は2音節語でなければならない。これは、中国語固有のもので、日本語では特にその制限を受けない。

C. 「に關しての」意味を表すか否か

(54) a * “对山的／理论”「山に對する理論」

○ “关于山的／理论”「山に關する理論」

b * “对工作的／知识”「仕事に對する知識」

○ “关于工作的／知识”「仕事に關する知識」

c * “对学历的／常识”「學歷に對する常識」

○ “关于学历的／常识”「學歷に對する常識」

上の各用例を中国語に翻訳する際、“对”とは翻訳できず、“关于”と翻訳できる。それは、日本語の「N₁に対するN₂」が「(N₁) それに關しての (N₂)」という意も表すのに対して、中国語の“对+N₁+的+N₂”は、そ

中国語の“对+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

ういう意を表さないからである。

D. 形容詞への指向性

(55) a* “对渚山的／悲伤”「渚山に対する悲しさ」

b* “对重吉的／悲惨 (情况)”「重吉に対するこの二度目のむごたらしさ」

日本語の、「ニ」格または「に対して」を取らない形容詞は、対象を指向する必要がある場合は、「に対する」を通じてその「対象」を、当該形容詞の名詞形と結び付けて示すことができる。中国語は、形容詞（“悲伤”「悲しい」「悲惨」「むごたらしい」）に、その「対象」（“渚山”、“重吉”）を指向させることができない。

E. 主体の位置

「N₁に対するV (N₂=動名詞)」における動詞が要求する「主体」をSとすると、日本語の場合は、「SのN₁に対するN₂」と、「N₁に対するSのN₂」との、2種類の表現が出来る。それに対し、中国語の方は、通常“S对+N₁+的+N₂”になる。“对+N₁+的SのN₂”になると、不自然になるが、比較の意味を表すと、さほど不自然でなくなる。

注

¹ 中国語の場合は、“对～的”と“对于～的”との2種類がある。本論文が“对于～的”ではなく、“对～的”を扱うのは、“凡用‘对于’的地方,都可以用‘对’。”(劉月華他1983・p175)「およそ“对于”が使われているところはすべて“对”を使うことが出来る」からである。

² 本論文でいう「～に対する」には「～たいする」・「～に対しての」・「～にたいしての」などと表記されたものも含まれる。

³ ここでいう“体”について、劉順(1998)では“‘体’指体词性成分, 尽管有时是

謂詞、但這些詞都已經具有了體詞的特點。”(p21)「“體”は體詞(名詞・代名詞、數量詞などの総称)の性質を持つ成分を指す。謂詞(動詞・形容詞など)である時もあるが、これらの語は全て體詞の特徴を持つようになっている。」と説明されている。

⁴ ここで「形容詞」と称するものは、いわゆる「形容動詞」を含む、広義の形容詞である。

⁵ ここで言う「V」とは、動名詞を指す。

⁶ ここで言う“対+N₁+的+N₂”における「N₂」は、本論文で言う「N₂」に含まれる「名詞」だけに相当する。

⁷ ここで言う「A」とは、名詞の性質を備えた形容詞を指す。

⁸ (3) bとcについて、後にふれる。

⁹ (7)は本稿筆者が補充した用例である。

¹⁰ 中国語学界では、名詞の研究に「結合価理論」を最初に導入したのは、袁毓林である。詳しくは袁毓林(1995)を参照されたい。

¹¹ (29)各用例と(30)の「元の文への還元((29)aを除く)」及び「主体」、「相手」、「受動者」への分析は、本稿筆者が説明するために付けたものである。

¹² 詳しくは朱徳熙(1982)を参照されたい。

¹³ ここに言う「動名詞」には、「考え・労い」のような、動詞の名詞形かまたは、「散歩(＜散歩する)」のようなサ変動詞形を持つ漢語が含まれる。

¹⁴ ここに言う「形容詞派生の名詞」とは、「ありがたさ・悲しさ・堪忍強さ」や「寛容・不安などの形容動詞語幹」を指す。

¹⁵ 「Nに対して…」から「Nに対するN」への転換は、実際にいろいろなことが絡んでおり、先行研究はかなり進んでいる。本論文は、「Nに対して…」から「Nに対するN」へのような、いわゆる連用から連体への転換が存在することを指摘するにとどめ、その成立条件などに関する原因究明は今後の課題とする。

¹⁶ 機能動詞について、詳しくは村木(1991)を参照されたい。

¹⁷ 詳しくは、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998)を参照されたい。

参考文献

北京大学中文系1955級、1957級語言班編(1982)《現代漢語虛詞例釋》，商務印書館
侯學超編(1998)《現代漢語虛詞詞典》，北京大學出版社

李小榮(2000)從配價角度考察“對於……”作定語的情況，《配價理論與漢語語法研究》語文出版社

劉順(1998)“對”字短語作定語的歧義問題，《漢語學習》第3期

劉月華、潘文娛等(1983)《實用現代漢語語法》外語教學與研究出版社

呂叔湘主編(1980)《現代漢語八百詞》，商務印書館

徐浩良、陳炯(1985)略說“對”字短語的類型，《中國語文通訊》第5期

中国語の“対+N₁+的+N₂”と日本語の「N₁に対する+N₂」について

袁毓林（1995）現代汉语二价名词研究，《現代汉语配价语法研究》北京大學出版社

袁毓林（1998）《汉语動詞的配价研究》江西教育出版社

張虹（1993）談談狀語和定語的轉換，《漢語學習》第2期

朱德熙（1982）《語法講義》，商務印書館

奥津敬一郎（1983）：「變化動詞文における形容詞移動」『副用語の研究』明治書院

奥津敬一郎（1995～1997）：「連体即連用？」『日本語学』1995年11月号～1997年9月号 明治書院

グループ・ジャマシイ編（1998）：『日本語文型辞典』くろしお出版

鈴木康之（1979）：「規定語と他の文の成分との移行関係」『言語の研究』むぎ書房

日本語教育学会編（1982）：『日本語教育事典』大修館書店

馬小兵（2001）：「中国語の介詞“対”と日本語の複合格助詞「に対して」」『日中言語対照研究会第4回大会発表要旨』

馬小兵（2002a）：「日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“关于”——その対応関係を中心に——」『日本語と日本文学』34号 筑波大学国語国文学会

馬小兵（2002b）：「中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」——「資格・立場」を表す“作为”と「として」を中心に——」『日中言語対照研究論集』第4号 日中言語対照研究会

村木新次郎（1991）：『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

矢澤真人（1987）：「連用修飾成分による他動詞文の両義性—状態規定の『～デ』と他動詞文の修飾構成について」『国語国文論集』16学習院女子短期大学国語国文学会

矢澤真人（1993）：「いわゆる「形容詞移動」について」『小松英雄博士退官記念日本語論集』三省堂

用例資料

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（発行：新潮社／発売：NEC インターチャネル）所収の、日本人作家による67作品全て（詳細は略）

《駱駝祥子》	1936	老舍	《老舍小説集》	長江文艺出版社
『駱駝祥子』和訳	1991	中山高志		白帝社
《黒雪》	1985	叶雨蒙		済南出版社
『黒雪』和訳	1987	朱建榮・山崎一子		同文館
《毛澤東伝》	1996	金冲及主編		中央文献出版社
『毛沢東伝』和訳	2000	田村忠よし他		みすず書店

（本学非常勤講師）